

四万十川を育む森の山守、森林ボランティア=四万十^{きこり}樵塾=

清流通信読者の皆様こんにちは。今回は四万十の森の山守達、森林ボランティア“四万十樵塾”についてお伝えします。



県土の84%が森林で覆われる“日本一の森林県”高知。そして、それを上回る約90%が森林の四万十川流域。まさに、清流四万十川は、この森林が育んだと言える。しかし近年、流域の人工林は、過疎や高齢化等により適切な管理が出来ず、放置され、荒廃しつつある。

四万十の山守、森林ボランティア“四万十樵塾”

2001年 四万十川財団は、このような状況を少しでも改善するためには、流域の人工林の間伐促進が不可欠であると考え、森林ボランティアの育成に着手した。“四万十樵養成塾”の開講だ。

そして2002年12月にはその卒業生達を中心となり、森林ボランティアグループ“四万十樵塾”を立ち上げた。現在メンバーは15名。“四万十川の環境保全に資すること”を目的とした流域での間伐作業を中心に、“間伐材利用のカトラリー作り”や“焚き火とダッチオーブンの集い”等、楽しみながらの多彩な活動を展開する。また、当塾出発点である「四万十樵養成塾」にもスタッフとして参加し、森づくりを担う人材育成にも積極的に取り組む。

四万十樵塾の事務局長を務める秋森稔さんは、その活動についてこう語る。

「発足して9年になりますが、活動の基本は、①安全②面白い③和気あいあい④独立⑤継続の5か条です。また、“樵の道”という技術向上マニュアルにのっとり、活動の中でスキルアップを図っています。継続は力なりと言われるように、地道な整備活動を続けてきたことが、流域の環境保全に、微力ながら役立っていると考えます。今後は、活動の幅を広げるためにも情報発信を積極的に行ない、森林づくりに関心を持つ人々との出会いを広げたい。」

サルナシ と キウイ

夏草生い茂る、8月上旬の 四万十町 “市ノ又山ふれあいの森”。

先程まで降っていた雨があがった森の中は、ひんやりとして、真夏であることを忘れるほどの涼しさだ。

森林ボランティア“四万十樵塾”のメンバーは、月一回、定例会の間伐作業で、ここを訪れることが多い。

間伐作業の合間、樵塾メンバーの一人、松岡正宣さんが突然頭上を指差した。「あれ、なんだか知っていますか？」下から見上げた枝の先には、いくつもの小さな青い果実が見える。「キウイの親戚“サルナシ”です。」

マタタビ科マタタビ属のつる性植物サルナシは、日本、中国、朝鮮などに分布し、本州中部以南では、標高600m以上の山岳地帯に自生するらしい。果実の形こそ異なるが、味はキウイフルーツそのものだという。それもそのはず、キウイの原種は中国南部に産するその近縁種“シナサルナシ”ということだ。『そうなのか、キウイフルーツは南半球原産の果物と思っていたら、ルーツはこんな所にあったのか』と、初めて聞くその話に、私は妙に興奮した。

松岡さんはイベントなどで、間伐材を使ってのマイ箸・マイスプーンなど“木のカトラリー作り”を指導する。

「木工は、手からの感触で木の暖かさを感じられます。私はマイ箸作りの時、参加者に木の名前を伝え、それを覚えてもらうようしています。なぜかという、人間でも同じですが、名前を覚えると相手に親しみがわいてくる。だから、もっと森や樹木に親しみを持ってもらえるよう、森の中の樹、植物について話すのです。」



四万十のきこり：それぞれの想い

松岡正宣さんが四万十樵養成塾に参加したのは'02年。養成塾第2期生だ。「父親が“炭焼き職人”だったので、幼い頃よく山に連れて行かれ手伝いました。そのせいか、山が楽しいと思ったことはなかったし、興味もなかった。ところが、仕事を辞めてブラブラしている時“四万十樵養成塾”の募集記事を偶然見つけて、何気なしに応募、参加したのです。チェーンソーを使うのも初めてでした。しかし、やってみたら実におもしろい。まるで、こう、ウルトラマンかなんかが怪獣を倒すときのような気持ちというのでしょうか、木を倒す行為は実に爽快です。けれども最近になって思うのは、間伐はただ木を伐るだけのことですが、つくづく、奥が深い。そういうことを感じています。」



急な斜面を登りながら、間伐する木に白いテープを巻く作業を続ける、林宏興さん。周りの木の様子を伺いながら、慎重かつ素早く、白いテープを巻いていく。間伐の時、伐る木を選ぶ“選木”という作業はとても難しく、キャリアを積まなければならないと聞く。林さんは、定年を間近に控えた年、四万十樵養成塾に参加した。退職後に、自山の管理のため、森林ボランティアに参加するためにと、この講座に申し込んだという。「家にあったチェーンソーはあまり使ったことがなく、“樵養成塾”がきっかけで使えるようになりました。以来、年間40~50日は山に行っています。」樵塾の仲間からも厚い信頼を得ていて「彼はもうプロですよ」との評判。「おかげで健康を維持出来ていますが、お金にはなっていません。そろそろ後進を育てないと。」笑いながらそう話す、林さんの次の目標は、“人を育てる”ことだという。



四万十樵塾には、昔からのメンバーも多いが、最近ここに加わった一人、田上裕三さん。「山歩きが好きで、森林ボランティアを希望していましたので、誘われて参加しました。まだまだ、見習い中です。」とはご本人の言葉だが、メンバーからはエリートコースを歩む熱心な“きこり”と紹介された。



木のことを考える、木と触れ合う、そして、その木がある山を守る。

間伐後の森の中は、先程までの薄暗さがウソのように明るく、生命観にあふれている。木漏れ日が入り、涼やかな風がながれる中で、秋森さんが話してくれた。「木を伐る前と伐った後、その違いは歴然としています。たった2~3本伐っただけでも、見た目だけでなく、森の中の風の流れが違って来る。間伐は木を伐るという作業ですが、結局、“山をつくる作業”のような気がします。どの木を伐るのかということで、木のことを考える、木と触れ合う、そしてその木がある山を守っていく、そんなことだと思うのです。」



2011年“国際森林年”と きこり達が目指すこと

今年2011年は、世界の森林の減少と劣化を食い止め、持続可能な森林管理・利用を拡げていくため、国連が定めた『国際森林年』だ。そのテーマである“Forests for People（人々のための森林）”は、私たち人類にとっての森林の重要性と、一人ひとりの行動の重要性を示すという。

彼らの活動は、まさに、そのテーマを実践に移したものだと言えるだろう。

「それでも、私たちが出来る間伐は年間2ha弱くらいで、流域の広さを考えるとたかが知れた量です。だから、自分達がボランティア間伐で役立っているとはあまり考えていない。それより、我々の活動を通じ、山に興味を持つ人が少しでも増えてくれればよいと願い、そうした活動を自分たちは目指したいのです。」

四万十樵塾が目指す方向性についての、松岡さんのシンプルなその答えに、メンバー全員が賛同するように頷いた。





取材から戻った私は、早速、“サルナシ”の物語をさぐってみた。彼らの近縁種が海を渡ってキウイとなったのが、わずか100年ほど前であること、日本にキウイフルーツが栽培され始めたきっかけは、サルナシの果実の味に魅せられた人が栽培果樹化を試みたがその困難さにこれを断念し、ニュージーランドからシナサルナシの改良種キウイフルーツを日本に導入したこと…などなど。

ストーリーを知った途端に、南半球の外国産キウイが、親しみある“身近な果物”に思えてきた。そして何故か、四万十の森に知り合いが増えたような、そんな気持ちが出てきたのだった。



サルナシの実